

むろ 室 遺 跡

調査の経過

建設省中部地方建設局名四国道工事事務所により国道23号線の交通量緩和を目的として国道23号線バイパスの建設が計画された。それを受けて愛知県教育委員会文化財課は、昭和62年に建設予定地内で試掘調査を実施した。その結果、室遺跡は、西尾市の東部、駒場町と室町にまたがる広田川左岸の自然堤防上（標高5.5m）に立地し、古代から中世にかけての遺跡であることが明らかになった。調査は、建設省名四工事事務所の委託を受け、平成3年4月から4年3月までの予定で8,800㎡を発掘した。発掘区はほぼ東西にわたり、幅40m、長さ220mである。

（山田 基）

調査の概要

上層から①耕作土層②近世の遺物をわずかに包含する明褐色土層③平安時代後期から中世にかけての遺物を多量に包含する暗茶褐色土層の順に堆積し、これが調査区全域に通有の基本層序である。暗茶褐色土層の下は、調査区東半部では自然河道のもたらした褐色砂層や流木を含む腐食土層が厚く堆積するに対し、西半部では平安時代前期から中期の遺物をわずかに含む黄褐色シルト層と青灰色シルト層があり、ついで無遺物層である黒色粘土層が堆積し、様相を異にする。中世の基盤面は褐色砂層と黄褐色シルト層の上面であり、木樋はこのシルト層と粘土層の間で検出された。

以上の層序と遺構の構造を考えて次の画期を設定した。すなわちⅠ期（平安時代前期から中期）、Ⅱ期（平安時代後期から中世）、Ⅲ期（近世）の3期である。

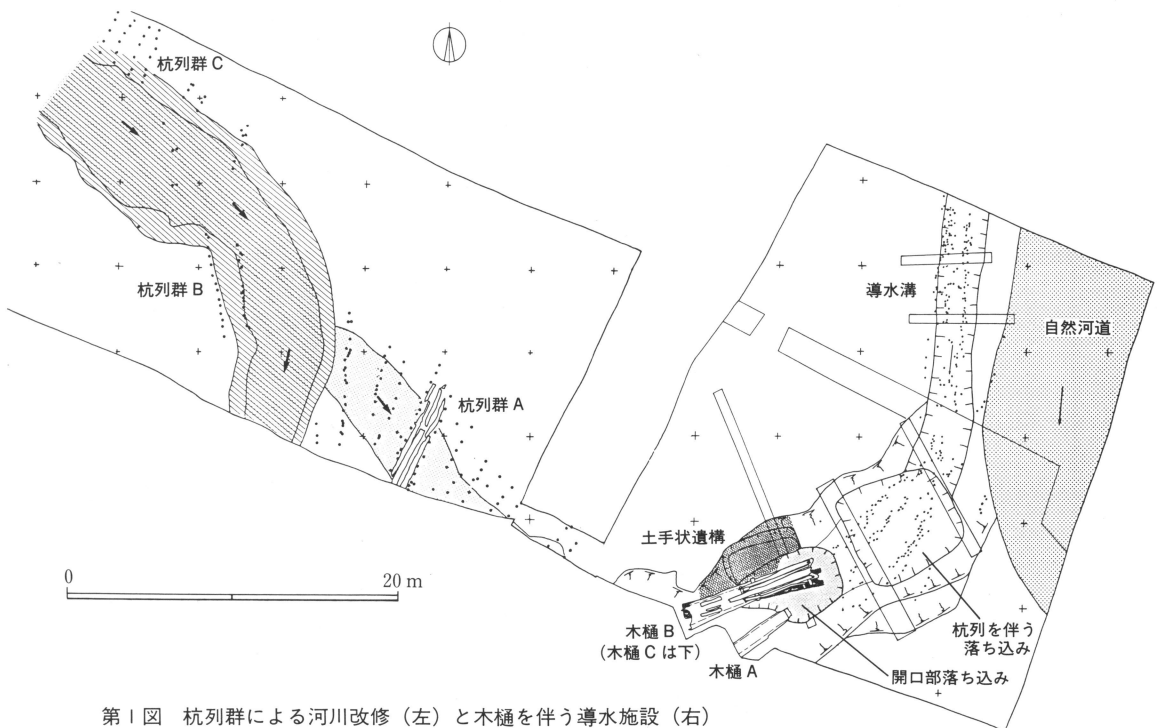
〈Ⅰ期〉 この時期に属する居住に関わる遺構は明らかにされていない。しかし、「木樋を伴う導水施設」と「杭列群による河川改修」が遺跡の西部で検出された。

「木樋を伴う導水施設」とは、3本の木樋と木樋開口部の乱杭を伴う落ち込み、木樋北の土手状遺構、木樋北東の杭列群を伴う落ち込み、それに接続する導水溝で構成される（第1図）。

〔木樋〕 木樋Aは、長さ3.9m以上（西の一端は調査区外に伸びているので全長は不明）、幅0.9m、内法0.8m、深さ0.2mの規模をもち、他の2基と同じく丸太を半割にしてU字形にくりぬいてあるが、蓋はない。埋土も白色砂が堆積している。開口している東端部には、えぐり込みによる段差があり、組み合わせ式になっていたと考えられる。開口部では開口部方向に傾斜し下がっているが、西半部は反対方向にやや傾斜している。材はクスノキ。

木樋Bは、長さ8.7m、幅1.2m、内法0.9m、深さ0.3mの規模を有し、丸太を半割にしてU字形にくりぬいている（土圧のため側壁部と中央部で縦に割れている）。側壁部の上端部には4ヶ所のえぐり込みを入れ、合計8本の横木を渡し、その上に板材5枚を縦方向に敷いて蓋としている。板材の中には転用材もある。木樋の中の土は周囲と同じ青灰色シルトで砂はない。内部より「田」と墨書された須恵器碗の破片が出土した。木樋Aと同じく開口部方向に傾斜（約5°）し下がっているが、木樋に沿って打たれた木樋を留めるための杭の先端のレベルを見るとほぼ同じであることから、本来は水平か水平に近かったと思われる。材はヒノキである。

木樋Cは、木樋Bの真下にほとんど長軸を一致させて設置しており、長さ8.6m、幅は開口部で1.1m、出水口部で0.8m、深さは開口部で0.1m、出水口部で0.4mの規模を有し、丸太を半割にしてU字形にくりぬいているが、開口部では極めて浅くフラットに近い。側壁部の上端部に5ヶ所のえぐり込みを入れ合計4本の角材の横木を渡し、その上にまるみをもたせた板材3枚を縦方向に敷いて蓋としている。規模はやや小振りであるが、形状は木樋Bと極めて酷似している。ただし、木樋Bより丁寧に作られているとの印象を受ける。木樋内部の土は灰褐色砂である。出水口部から中央まで開口部方向に強く傾斜して下がっているが、中央部から開口部まではほぼ水平である。材は木樋Bと同じでヒノキである。（第2図）



第1図 杭列群による河川改修（左）と木樋を伴う導水施設（右）

[木樋開口部の乱杭を伴う落ち込み] 木樋B・Cの開口部を取り巻いて、幅9m、長さ6m、深さ1.7mの規模を有する落ち込みがある。木樋Cを設置した時点で掘り込まれ、木樋Cの開口部は完全にこの落ち込みの中にある。この落ち込みには、木樋の開口部を囲むように、不規則な杭群とそれに絡んだ加工痕の見られない自然の丸太材が見られる。杭の中には長さ2m、直径20cmと太いものもあるが、その他はおおよそ10cm前後の太さである。「万」と墨書された灰釉陶器の皿がこの乱杭の中から出土している。

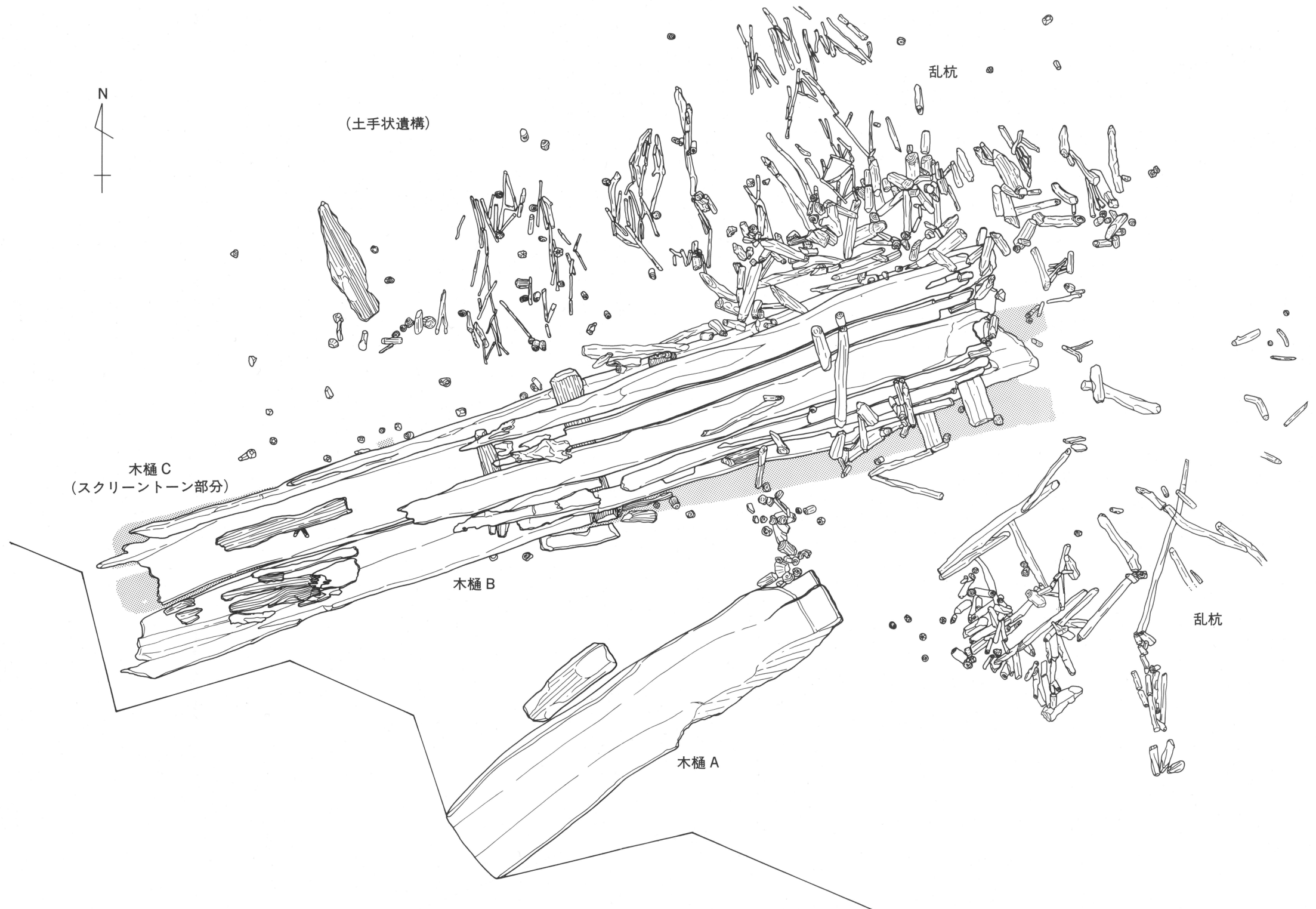
[土手状遺構] 木樋Cの北に、木樋の長軸に直交する方向に、小枝のない細い枝やヨシ・アシの類が同じ方向で、水平に（木樋に近づくにしたがって傾斜しながら）、少なくとも12層以上（高さ0.5m）が、灰色土と交互に敷かれ、版築状に堆積している。またこれを留める機能を持つと思われる杭が打ち込まれている。一部は木樋Bと木樋Cの間や落ち込み内にも存在する。木樋Bの掘り方によって破壊されていることから、この遺構は木樋Cに伴う土手状遺構と考えられる。ちなみに木樋Bに伴う土手遺構は削平されたため検出されていない。

[杭列を伴う落ち込み] 開口部の落ち込みの東に、東西6.6m、南北6m、深さ1.6mの規模を有する急に深くなる落ち込みがあり、その中に杭列が打たれている。杭列は5列と見られ、東の2列は短い、西の3列は長く、特に中央のは2本セットで南北に弧状に貫いていて、北の導水溝の杭列につながっている。杭は先端のみ削ってとがらせ、残りは樹皮を残している丸太杭がほとんどで、太さも10cm前後が圧倒的に多い。杭の先端は落ち込みの底には届かず、落ち込みが掘削された時期と杭列が打たれた時期に差があることを示している。

[導水溝] 杭列を伴った落ち込みにつながる溝は、幅2.5m、深さ0.9mの規模で、自然河道に沿ってほぼ南北に16m走り、調査区外に続いている。この溝は掘り直しが少なくとも1度行なわれ、新しい溝には護岸用の杭列が両肩に見られ、南の落ち込み部に打たれた中央の杭列につながっている。

木樋内部および周辺で検出された須恵器や灰釉陶器からみて、木樋A・Bの築造時期は平安時代中期（O-53）であり、木樋Cも木樋Bと構造が類似することからそれほど時期が下るとは考えられない。

さて、この木樋を伴った導水施設の機能を整理しておくと、[導水溝]によって北から南に水を導き入れて、いったん[落ち込み部]に貯水したのち、[土手状遺構]で水位を高めて水をオーバーフローさせ、[乱杭]で流木・葉・ごみなどを除去してから[木樋]を通して南の高所に送水したと考えられる。ただし、出水側について



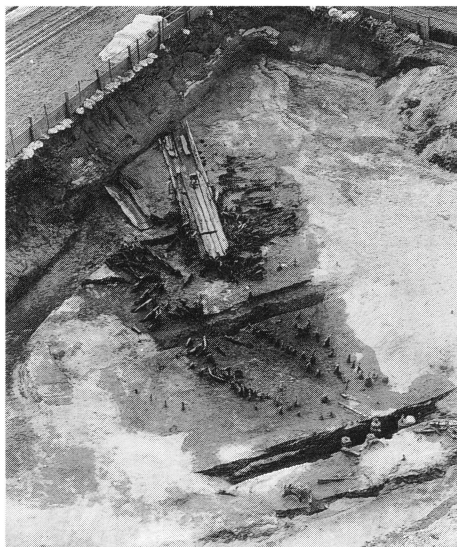
第2図 木槨平面図 1:40

は調査区外であるため内容は分からないが、遺物の量が極めて少ないことから集落とするよりは水田である可能性が極めて高い。

木樋が検出された発掘区の西において、自然河川の流れを変えるためのものと考えられる杭列群が検出された。杭列群は大きく3群に分けることができる(第1図)。杭列群Aは自然河川を横断して打たれており、杭にはつる状の植物・小枝が「しがらみ」状に絡んでいる。また、杭列と杭列の間には自然木が敷き詰められ、特に中央部では太い丸太が3列横たえられ、動かないように杭でとめられている。西端の杭列は他と比較して密度がもっとも高い。杭列群Bは、自然河道がL字状に曲がるコーナーの川肩に沿って打ち込まれており、「しがらみ」はなくつる状の植物が数条水平に渡してある。また杭の密度は高い。杭列群Cは自然河道に直交して半分ほどかかり、杭にはつる状の植物・小枝・ヨシアシ類が「しがらみ」状に絡んでいる。これらのことから次のように考えられる。本来自然河川は北西から南東にまっすぐに流れていたが、

何らかの理由で、流れを南に変える必要が生じたために、杭列群Aで流れを堰き止め(締め切り)、杭列群Bを護岸として南に方向転換させた。また、杭列群Cは、水流を制御する機能があったと推定される。

これらの杭列がいつ打たれたかは、杭列群A付近で平安時代に属する土器小片が出土しただけで詳細は不明であるが、土層堆積から見ると木樋とほぼ同時期と考えて誤りはないと考えられる。



木樋を伴う導水施設



杭列群による河川改修

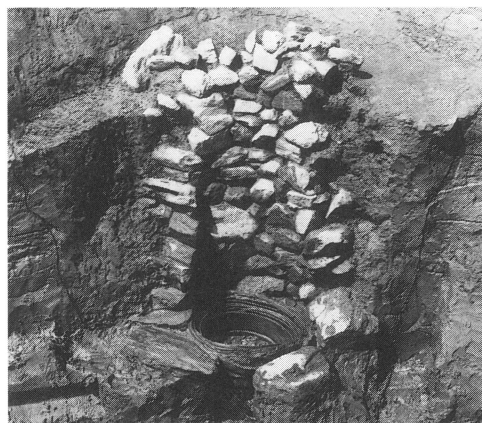
〈Ⅱ・Ⅲ期〉中世の集落の構造として、数条の溝によって区画される屋敷地が5ヶ所確認された。うち2ヶ所は一部が明らかになっただけであるが、他の3ヶ所はほぼ全体像を把握することができた(第3・4図)。屋敷地や溝などから13世紀から15世紀中頃の遺物が出土している。

屋敷地Aは25mの正方形を呈する溝に区画される小規模な屋敷地で、東半部では溝が掘り直され外へ拡張されている。屋敷地内部には井戸を持たず、遺物も極めて少ない。屋敷地Bは、東西55m(南北は不明)の規模を有し、膨大な数の柱穴と土坑が検出され、出土遺物の量も多く、石組の井戸と素掘りの井戸を持ち、この集落内で主体となる屋敷地と考えられる。屋敷地Eは、2本の溝が不整形形に巡り、内側の区画は東西25m、南北20mの規模を持つ。内部からは建て替えられた掘立柱建物2棟、叩き締められた土間状遺構と方形の竪穴を伴う建物、石組の井戸、土坑などが検出された。

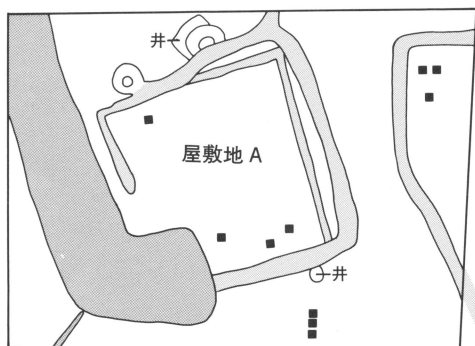
以上の中世の集落が廃絶した後に、火葬施設が発掘区全域に多くても3基ほどのブロッ



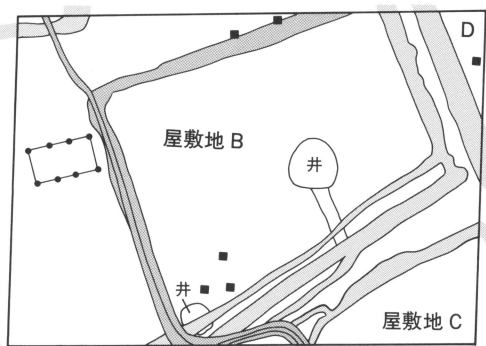
屋敷地E



石組井戸



■：中世 ■：近世



■：火葬施設

0 20 m

第3図 Ⅱ・Ⅲ期遺構配置図(左：A区 右：B区)

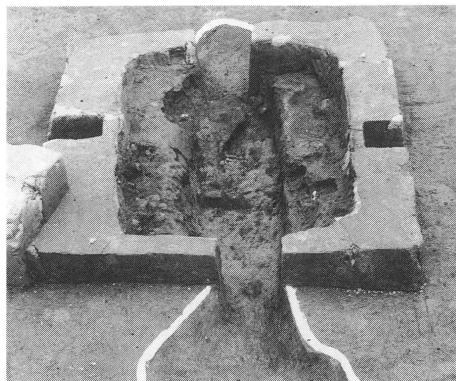
クにまとまって点在する。検出総数は22を数える。良好に残存するものを見ると、一辺1m前後、深さ30cmほどの長方形の燃烧部と中央部に長軸にそって通風溝を有する構造が明らかになった。燃烧部の壁面は熱を受けて赤く焼けており、内部から炭化物、灰に混じって骨片と歯根が検出されている。しかし、土器が伴出しないため時期は明らかでないが、堆積した土壌を考慮すると、中世末期から近世初めであると考えられる。

調査区西部で、常滑産の甕と桶を伴った江戸時代末期の小規模な水田址を検出した。この水田の南西隅では、常滑産の土樋（土管）を使った排水施設も明らかになった。

まとめ

平安時代の大型の木樋を使った灌漑施設は、全国で初めての検出されたものである。杭列による自然流路の改修も含め、地方での水田開発を具体的に明らかにできる非常に重要な資料となるであろう。また、中世の灰釉系陶器、瀬戸美濃産の施釉陶器、常滑産の焼き締め陶器に混じって200点以上の貿易陶磁片が出土するなど、中世の集落の構造とその性格を解明するうえで極めて良好な遺跡でもある。

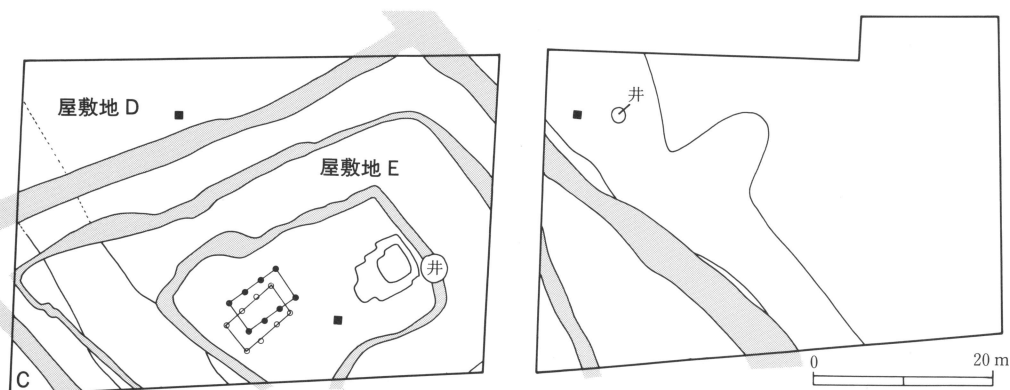
（都築暢也）



火葬施設



江戸時代末期の土樋



第4図 II・III期 遺構配置図（左：C区 右：D区）